

現代シリアにおけるパルミラ監獄経験の表象 ——ムスリム同胞団員手記にみる〈意味のレジリエンス〉——

岡崎 弘樹

I. はじめに パルミラ監獄をめぐるイスラーム主義者の語り

シリアの首都ダマスカスから北東に約 200 キロメートル、バスに揺られて 3 時間ほど向かったところにパルミラ（アラビア語で「タドモル」）という街がある。紀元後 3 世紀に女王ゼノビアの支配下で繁栄を極めたパルミラ帝国の遺跡は世界中から観光客を招き入れ、長らくシリアの主要観光地として重要な地位を占めてきた。広大なシリア砂漠のオアシスに栄えた古代都市の面影に歴史的ロマンを感じる外国人も少なくなかっただろう。

ところが、シリア国民の大半にとってパルミラは決して人気の観光地ではなく、むしろ 1970 年より続くアサド政権下での悪名高い恐怖の流刑地として知られてきた。1970 年代後半に政権とイスラーム主義勢力との衝突が激化した後、政権側はパルミラ監獄に収容していたムスリム同胞団員を中心とする囚人らを大量虐殺した。「砂漠の収容所」にはその後もイスラーム主義者に限らず、世俗主義的な反体制派も送り込まれ、過酷な拷問や恣意的な処刑、外界との完全なる断絶、感染症の蔓延が問題視されてきた。それゆえパルミラ監獄は世俗主義的な反体制派作家であるファラジュ・バイラクダール¹⁾によって「死と狂気の王国」²⁾、またヤシーン・ハージュ・サーレハ³⁾によって「絶対的な監獄」⁴⁾と呼ばれた。2001 年には一度閉鎖されたものの、2011 年以降に抗議運動参加者の収容のために再開され、多数の人権報告書

においても非人道的な刑務所として長らく語り継がれてきた⁵⁾。

とはいえ、世俗主義的な作家や人権報告書において語られるパルミラ監獄の経験については、その実態や苦難の重さを理解する上で一つの大きな問題を抱えていた。それは、収監者の大多数派であり最たる犠牲者であるムスリム同胞団員による語りは、その全体の量と比べても極めて少なかったという点である。パレスチナ系ヨルダン人作家によってパルミラ監獄の経験談について最初にまとまった形で示されたものの、多数の同胞団員はすでに処刑されたり、釈放された後も深いトラウマを抱え経験を語ることができなかったり、逆に語ろうとしても教条的で紋切り型の武勇伝に陥ったりする場合もあった。サーレハはイスラーム主義者が「自分の狭い空間に閉じこもり、教義や教条、紋切り型の世界観に陥らない経験の用い方について確信をもてないままにいる」として次のように指摘する。

イスラーム主義者のおなじみの思考パターンによれば、彼らを監獄に追いこんだのは〈悪しき支配者たち〉です。私はアドラー刑務所で美しい祈りの言葉を聞きました。「アッラーはあなたを恐れない者やわれわれに慈悲を与えない者をわれわれの支配者にすることははない」というものです。たとえこのような支配者がいたとしても、すべてはアッラーの長期計画に委ねられており、きわめて相対的な問題となるだけでなく、完全に消え去るというのです。ここで悪政は歴史的なものではなく、政治や社会の論理を明らかにすることもなければ、いっそう公正な状況のために抵抗しうるものでもありません⁶⁾。

サーレハのみるところ、イスラーム主義者は「アッラーの計画」という予定調和的な観念に基づいてしか監獄経験を語ることはできない。そこでは個人の顔は見え、世俗主義的な反体制派政党元幹部などによって書かれてきた「英雄主義的な神話と瓜ふたつの喧伝の言説」しか生み出すことはできないというのである⁷⁾。

ところが、こうした見方を改めさせるような手記が最近刊行された。それは、シリアのムスリム同胞団員であったムハンマド・バッコの『ギロチン台からの生還者—パルミラ監獄における8年間—』（以下『ギロチン台』と簡略、2021）⁸⁾である。バッコは1980年、17歳のときにムスリム同胞団系武装組織「戦闘前衛隊」の機関誌『警告』（アン・ナジール）を回覧した罪で拘束され、拘置所からアレppo中央刑務所を経て、パルミラ刑務所に7年半にわたって収監された。その後にアドラー刑務所などに移送されたが、同書は拘束からパルミラ刑務所への移送、そこでの日々を内省的に回顧した作品である。バッコはサーレハなどの世俗主義的な論者にも一目置かれてきた存在であり、また同書には元パリ3大学教授で2012年に反体制派連立組織「国民評議会」の議長であったブルハーン・ガリユーンが序文を寄せている⁹⁾。それゆえにバッコはイスラーム主義者の立場を保ちながらも単純な予定調和的な観念を避けつつ、最たる犠牲者に属しながらも、宮地尚子の環状島の議論を借りるならば、「トラウマの内海」の深奥部から生還し、広い読者層に訴える形で経験の表象を成し遂げたとと言える¹⁰⁾。

本論ではまず、シリアの監獄文学の中でパルミラ刑務所をめぐり、拷問の日常化や視覚の抑圧といった物理的、心理的な支配が世俗主義的な作家やシリア人以外のイスラーム主義者によっていかに描かれたのか、人間的な抵抗の余白がどこに見出されたのかについて着目する（II.）。そのうえでシリアのムスリム同胞団員であったバッコの『ギロチン台』を読み解きつつ、生かさず殺さずの「剥き出しの生」の諸相だけでなく、来世と現世におけるふたつの救済への模索といった課題についても検討する（III.）。さらに結論として、かかるバッコの思想がアウシュヴィッツの生還者ヴィクトール・フランクルの語る〈意味のレジリエンス〉と共鳴しあっている点を確認したい（IV.）。かくして全体を通して、フランクルの他にもプリーモ・レーヴィやジャン・アメリーといったナチ収容所生還者の手記とも比較することで、パルミラ監獄の経験が決してシリア独自のものではなく、ホロコーストをはじめとする「絶滅戦争」に関わる普遍的な課題として語られていることを立証

する。

II. シリアの監獄文学とパルミラ監獄をめぐる語り

1. シリア監獄文学の中のパルミラ刑務所

現代シリアの政治囚史は3つの段階に分けられる。第1はエジプトのアブドゥルナーセル大統領との「アラブ連合共和国」(1958-1961)を経てバアス党の一元独裁体制(1963-)に至るまでの時期で、共産党員やバアス党内部の反対派勢力に属する政治エリートが主たる犠牲者となった。続いて第2にハーフェズ・アサド政権成立以後、特に1970年代後半における反対勢力の一斉検挙にともなう、世俗主義的な反体制派勢力の青年活動家やムスリム同胞団を中心とするイスラーム主義者など計数千人規模の長期収監である。さらに第3に2011年以降の民衆蜂起以後に生じた過酷な弾圧の中で、拘束者数が約120万人ともされる時期である。まさにサーレハの言う通り、シリアにおける収監の歴史は、「政治エリートへの一時的な自由の制限から、反体制派への無制限の恣意的拘束と日常的な拷問へと、さらに一般の人々の大規模な拘束と拷問による大量殺戮へと発展」¹¹⁾した。

とはいえ、こうした経験と並行して、政治囚の収監経験に関する語りも変容した。1960年代以前においては大物政治家の手記が主流であったものの、1972年に小説家ナビール・スライマーン¹²⁾の小説『監獄』と翌年に発表されたエッセイ「監獄文学に向けて」を皮切りに「監獄文学」と呼ばれるジャンルが確立された。こうした流れはやがて1980年代後半以降、イブラヒム・サミュエル¹³⁾やガッサーン・ジバーイー¹⁴⁾、ファラジュ・バイラクダールといった才能ある小説家や詩人によって受け継がれた。作家らは概して拘束や尋問、拷問といった従来のあるきたりな側面よりも、むしろ収監生活における生活のディテールや家族との面会、他の囚人とのコミュニケーションの際に生じる心理的な描写に着目し、収監問題を「国民的課題」として広く共感を得る形で訴えようと試みた¹⁵⁾。とはいえ、作家らが舞台とし

て設定していたのは、アレッポ中央刑務所やダマスカス郊外のアドラー刑務所、サイドナーヤ刑務所といった世俗主義的な反体制派活動家が多数収容されていた監獄であった。その一方で、極めて非人道的で文学を通じて描くことなど不可能な「砂漠の収容所」については依然として語られることは少なかった。

パルミラ監獄は 1930 年代のフランス委任統治時代に軍の前哨基地として建設され、1946 年の国家独立後に軍人の通常犯罪者の刑務所として機能していたが、政治囚も収容され始めたのは 1960 年代後半からとされる。ハーフェズ・アサド政権下（1970-2000）では増築が行われ、1980 年代から 1990 年代にかけて主としてムスリム同胞団員の流刑地として機能し、2 万人以上の収監者を抱え、数千人規模での虐殺や処刑の場となった。

人権報告書で断片的に記されていたパルミラ監獄の実態を初めて一冊の形で明らかにした著書は、シリア人ではなくパレスチナ系ヨルダン人のムハンマド・サリーム・ハンマードの手による『パルミラ、目撃者と目撃されたもの—アサド刑務所の収監者手記—』¹⁶⁾（1998 年初出。以下、『目撃者』と簡略）であった。ハンマードは 1960 年にイラクで生まれた後、家族とともにパレスチナのナブルスを経て最終的に隣国ヨルダン北部のザルカに落ち着いた。小学校時代から熱心にモスクに通ってイスラームの実践を志し、高校時代にはヨルダンで合法組織であったムスリム同胞団の学生部リーダーとなった。1977 年に同地での啓蒙合宿のために来訪したシリアのムスリム同胞団幹部に感化され、やがてシリアのダマスカス大学で土木工学を専攻した後、両国同胞団の連絡役を担った。だが 1980 年 8 月にシリアからヨルダンに向かう際に国境で拘束され、軍情報部の留置場で尋問と拷問を受けた後にパルミラ監獄に移送され、最終的に釈放されたのは 1991 年であった。

『目撃者』は多くの獄中記と同様に、政治組織での活動から拘束、尋問、拷問、地下室や大部屋への移送、そこでの生活、他の収監者との会話、そして釈放と新たな生活の始まりにいたるまでの一連の流れを時系列的に説明している。この意味ではスライマーンの古典的な小説『監獄』と物語構造的に

はそれほど変わらないものの、アサド政権にとって「不倶戴天の敵」とされていたムスリム同胞団員であったハンマードの経験は、後述のようにあまりに過酷なものであった。

言及すべきは2000年代に入ると、パルミラ監獄についてシリア人自身の語りも始まるが、その大半は世俗主義的な作家の手によって語られたということである。バイラクダールの『言葉と沈黙の裏切り—シリアの軍事刑務所での疎外経験—』(2006)¹⁷⁾やハリーフアの小説『巻き貝—覗き見の日々—』(2008)¹⁸⁾といった文学作品、ハーラ・ムハンマド監督による記録映画『記憶への旅』(2006)などはよく知られている¹⁹⁾。すでに別稿で述べた通り、かかるシリア人作家の語りにおいては決して告発的な調子が前面に出ることはなく、祖国における過去の過ちとして、あるいは「恥の記憶」として次世代に伝えていく姿勢が強調される²⁰⁾。

とはいえ、いかなる証言においても、パルミラ刑務所が他の刑務所と一線を画していることは一目瞭然である。この監獄では面会もなければ、本や筆記用具、娯楽の手段、台所、ストーブ、お湯といった生活必需品もない。外界と完全に断たれた空間を経験した後に生還した者は、多種多様にわたる拷問や迷宮性といった物理的な支配、視覚の剥奪による心理的な支配の過酷さについてつぶさに証言することになる。

2. 物理的、心理的な一望監視の支配

砂漠の収容所は、夏は灼熱の太陽にさらされ、冬は氷のように冷たく冷えこむ。こうした移り変わりの激しい厳しい自然環境下において、増築された「政治囚棟」と呼ばれる棟には全部で45房以上とされる大部屋（共同房）がある。一つの共同房は5メートル×15～20メートルの75～100平米のスペースであり、最大で200人近い囚人が押し込まれる。ジバーイーが述べるように個々人には40センチメートルの幅しか与えられておらず、「1センチの余裕を求めて争われる」²¹⁾。拷問官や看守による言葉による憎悪に満ちた侮辱が日常生活で徹底されている。「この畜生め」、「糞野郎め」、「ホモ野郎」、

「売春婦の息子め」、「お前のおふくろや姉を犯してやる」、「おふくろのオマンコはどうだ?」、と極めて侮蔑的かつ下品なスラングで囚人を心理的に徹底的に痛めつける。

とはいえ、そもそも何よりも耐え難いのは、毎日のように繰り返される物理的な暴力、すなわち過酷な拷問である。『目撃者』に限らず多数の人権報告で語られるように、パルミラ刑務所に移送される前ですら唾の吐き掛けから始まり、殴打や蹴り、「タイヤ責め」²²⁾、「空飛ぶ絨毯」²³⁾、「ドイツ椅子」²⁴⁾、鞭打ち、電気ショックと続き、ハンマードはわずか数日間で「10キロから15キロも痩せた」²⁵⁾。だが「歓迎会」と呼ばれる到着した際のものであれ、一部屋あたり5～6グループに分けられ中庭で連日6時間近くにわたって実行されたものであれ、パルミラにおける拷問の厳しさはシリア各地の拘留所や刑務所におけるそれとは大きく異なる。再現ドキュメンタリー『タドモル』によれば、パルミラでは通常のケーブルではなく「冬は木のように固く、夏はいっそうしなやかな戦車のファンベルト」が鞭として用いられる。他の刑務所で50回程度の鞭打ちも、パルミラでは3方向から250回、悪質な刑務所長（通称「アブー・ジャフル」、アラビア語で「無知の父」の意）の下でイスラーム主義者には500回が加えられる。殴打の回数は囚人自身が数えなければならず、数え間違えると最初からやり直しとなる。命を落とす者も少なくなかったのは言うまでもないが、拷問を受けていない者も四六時中拷問の音や叫び声にさらされ、心休まることはないという²⁶⁾。

多種多様なグロテスクな虐待行為は他にも存在する。一部の者は歓迎会のときから目を付けられる。その対象となったハンマードによれば、食事もほぼ拷問に近く、朝食ではチーズや乾パンなどが配られるが、バケツに入れられた吐き気を催すような紅茶を無理やり飲まされた。昼食や夕食も小さく固いパンと多少のジャガイモ、卵一つを6人で分け合った²⁷⁾。トイレも夕方6時から朝までは禁止である。入浴も一カ所に集められ、殴打されながら冷水をかけられるから、辺りは泥と血の海となる。散髪も精神的な苦痛を与える手段である。長期収容によって伸びた髪や髭を看守らは殴打を加えながら手

動カミソリによって力ずくで切り落とし、髭をも剃り上げ、「スイカのように丸坊主」にする²⁸⁾。イスラーム主義者やそれ以外の一部のアラブ人男性にとって髭は自らの名誉の象徴でもあるが、パルミラでは礼拝や断食、小淨(ウドゥ)と同様に一切禁止されている。散髪行為そのものが、敬虔なムスリムに対して一種の屈辱感を与える大きな効果となる。さらにはゴキブリやネズミの死骸を食わせる、獄外で待つ妻との離婚の強制や、兄弟同士を性行為させるという異常極まる虐待なども『目撃者』で報告されている²⁹⁾。壁を見上げれば1980年6月の獄内での大量虐殺を偲ばせる弾痕や血痕が依然として残っている一方、月3回程度の「審理」³⁰⁾と即座に執行される「絞首刑」に日々怯えながら、心身ともに疲弊していく。

アウシュヴィッツの生還者ジャン・アメリーは、現実には拷問を受けたまさにその瞬間には「凡庸な悪」(ハンナ・アーレント)といった生易しい見解を持つことはありえず、むしろ「最初の拳が落ちてきたとたん世界への信頼が崩れ去る」³¹⁾と明言した。その意味では、ナチとアサドの収容所は同じと言えるかもしれない。とはいえ、サーレハが両国の収容所を比較するところによれば、ナチの収容所は資本主義的な秩序が浸透しており、労働力として役に立たない者(ムーゼルマン)から順番にガス室に送り込まれ、拷問に関しては「敢えて尽力するまでもない」。その一方で、パルミラは効率的な殺戮以上に主従関係を暴力を通じて徹底して教え込む規律の場である。かくしてパルミラでの拷問は「俺は強者で貴様は弱者、俺は巨人で貴様は害虫、俺がアッラーで貴様は何ら価値のない存在」という力関係を教え込む最良の手段に他ならないというのである³²⁾。

かくしてパルミラではまさに「拷問のための拷問」となる。ガリユーンが述べるように、拷問プログラム自体は、単一の規則に即しているわけではない。「暴力の手段を生み出し、作り出すことはそれぞれ拷問官にまかされているから、犠牲者の心理的な破壊に関していっそう深刻な影響を与えうる」。多様な拷問はロシア軍の指導の下で練り上げられたにせよ、拷問官それぞれは、創造性という意味で互いに競争を繰り広げる。この競争ゆえに、「人類

が何万年もかけて古代から現代にいたるまで文明を生み出す中で飼いならそうとしてきた原始的な本能に対する^{たが}箍がはずれた状態」に陥っているというわけである³³⁾。

さらに囚人の恐怖心を増大させるのは、「視覚の支配」というべき管理の徹底であった。パルミラ刑務所に移送されたときだけでなく、大部屋から連れ出されるときも目隠しや手枷をされ、頭を下げて前列の者の腰に手を当てて進まなければならない。大部屋内においても常に高すぎて手の届かない天窓やふたつの鉄格子の通気孔から監視されている一方で、他の囚人と話をしてはならないどころか目も合わせてはならず、合わせたことが分かった場合には再び懲罰の対象となる³⁴⁾。ハンマードは拷問中ですら自発的に一切目を開けてはならないとして、次のように語る。

パルミラ軍事刑務所の法はダマスカス諜報機関の地下牢のそれとは異なると、後々理解した。ダマスカスでは尋問者や拷問者を見ないように目隠しをされた。だがパルミラでは目隠しではなくて、誰が見えようとも自ら目をつぶらなければならない。電線で撃たれようが、鞭で体が裂かれようが自ら目を閉じなければ罰は重くなるのだ³⁵⁾。

ハンマードが自著に「目撃者と目撃されたもの」という題を添えているのは、「視覚の支配」を意図していると考えられる。まさにミッシェル・フーコーが『監獄の誕生』で述べる通り、「見られてはいても、こちらには見えないのであり、ある情報のための客体ではあっても、ある情報伝達をおこなう主体には決してなれない」。しかも、そこでは囚人が実際に監視されているかというよりも、監視されていると「感じている」、「想像している」ことが肝要である。なぜなら「現実における服従の強制は、虚構的な関係から機械的に生じる」のであり、被拘留者は「自らの権力による強制に責任を持ち、自発的にその強制を自分自身へ働かせる」からである³⁶⁾。サーレハが描写するように、目隠しされて移動させられるがゆえに収監者は建物の構造

を把握しておらず、大部屋の鉄扉や周辺の敷地から出ることができたとしても、道を知らないのだから出口の方向に進めない「迷宮」でもある³⁷⁾。すなわちパルミラ監獄は物理的、心理的な支配様式に鑑みても、現代シリアにおけるベンサム的な一望監視施設の具現化に他ならないというのである。

なお『目撃者』では、感染病も含めてさまざまな病気が蔓延したことも詳細に伝えられる。足を撃ち抜かれ銃創を抱えたまま痛み、苦しみに苦しみ、または不衛生な環境ゆえに虱や疥癬は常に発生、飢餓による黄疸に加え、冬の凍てつく空気によりインフルエンザやリ्यूマチ、関節炎にもなやまされた。コレラや赤痢、結核が蔓延しても何ら治療も受けられない³⁸⁾。深刻な衛生面での状況にもかかわらず、刑務所専属の医者は治療のためではなく、あくまで囚人を殺さず懲罰を与え続けるためだけに存在する。まさにフーコーの言うところの「生政治」の実験場である。

現代の伊哲学者ジョルジョ・アガンベンがレーヴィの考察をもとに分析するように、アウシュヴィッツは「例外状態が正規のものにとびたりと一致していて、極限状況が日常的なもののパラダイムそのものとなっている場」と言える。そこで究極の犠牲者（ムーゼルマン）は、「その生が本当の生ではなくなった者としてあらわれ、またある場合には、その死を死とは呼ぶことができなくなって、死体の製造としか呼ぶことができなくなった者としてあらわれる」³⁹⁾。

生かさず殺さずの「永続的な例外状態」は、イスラエルによるパレスチナの占領行為に顕著であるが、パルミラ監獄でも同じであろう。『記憶への旅』で、バイラクダールはあまりに非人間的な環境に置かれたために性欲すら完全に失われてもはや欲情したり勃起することもなくなったと想起する。サーレハは、妄想する力も衰え、生活の基本中の基本的な事柄を切望し、ムスリム同胞団員にとって最大の夢は「脚を伸ばして寝ることだった」と回顧する。ハリーファは小説『巻き貝』で、獄外の日常生活のありふれた一コマを心から切望する精神状態について次のように文学的に描いている。

私は小さな夢のひとつを見る。あらゆる夢が小さくなったとしても、だ。一日でいいから、孤独な独房で静寂に包まれ、騒音もなく、敵意や侮蔑の視線もないままに暮らし、ぐっすりと眠りたい……通りの日陰をしずかに歩き、仕事もなく、特に用事もなく、どこに行くでもなく、時間にも縛られず歩き続ける夢。朝、母に起こされても毛布をかぶって起きようとしないう夢。朝、誰かが私に「おはよう」と言う夢を見るのだ⁴⁰⁾。

3. 人間的な抵抗の余白

想像力すらもますます削り取られるような環境下で、人間的な抵抗の余地は果たしてどの程度残されていたのであろうか。ハンマードは「パルミラの市街から聞こえてくるアザーンの音に一瞬の安らぎを感じた」⁴¹⁾と証言しているが、視覚が奪われたからこそ聴覚が研ぎ澄まされるという逆説は注目される。

こうした感覚を十全に描いたのが、ハリーフアの『巻き貝』であった。パリで映画を学んでいたエリート青年がシリアに帰国した際に空港で拘束され、反体制派組織との関係を疑われ尋問と拷問を受けた後、「砂漠の収容所」に連行される。主人公はキリスト教徒コミュニティー出身で世俗主義的であったために、看守だけでなく共同房のイスラーム主義者にも敵視される。かつてレーヴィはアウシュヴィッツという「絶望的な状況にあっても、殻を分泌し、周囲に薄い防御膜をめぐらして、避難所を作り上げる人間の能力には、目を見はる」⁴²⁾と述べたが、『巻き貝』の主人公もパルミラにおいて看守側と大部屋の同胞の両面からの疎外感にさらされる中で、一日中毛布をかぶり自ら視界を遮りながら、拷問の日々を耐え抜いていく。一望監視施設の観察される行為主体から逆に周りを観察していくというスタイルは興味深い。もともと主人公が映画製作者という設定も手伝って、映像を奪われた主人公が音に固執する感覚が小説のいたるところに散りばめられている。たとえば、拘束後間もなく目隠しをされて受ける拷問の最中の模様は次のように描写される。

私の背後では、同じような事態が進行していた。ケーブルの音、蹴り足のぶつかる音、痛がる若者の声、拷問役の喘ぎ声が聞こえる。数分前に見た肉片が飛び散る音も聞こえてきそうだった…音…音。目の見えない者にとって、音こそが支配者だ⁴³⁾。

小説では音のふたつの側面が描かれる。ひとつは恐怖心を煽り植え付ける要素としての音である。治安機関幹部の到来を告げるヘリコプター、他の囚人の拷問時の殴打や彼の叫び声、大部屋に近づく看守の靴、床を叩く棒、牢鍵の開け閉め、見張りが天窓に上るときの軋みなどすべての音が精神的な疲弊の要素となる。主人公は回想する。「13年間、鉄扉の鍵の音を聞くと、心臓がもぎ取られるような気がしてならなかった。慣れるわけがない」⁴⁴⁾。だが、逆に音そのものは支配の要素だけではなく、人間的な抵抗の余地を与えてくれるという側面も見逃せない。かつて短編小説家イブラヒム・サミュエルは大部屋同士のコミュニケーションが「咳払い」を通じてなされている様子を一つの物語作品に仕上げたが⁴⁵⁾、ハリーファもまた死体がトラックに積まれる際のドサツという音の回数からその日の処刑者数を把握し、大部屋同士の壁を「モールス信号」のように叩きながら情報を交換していたと語る。

音のコミュニケーションと結びついてきたのが記憶術である。そもそもイスラーム生誕から最初の20年間においてクルアーンは書物（マスハフ）ではなく朗誦や暗唱によって伝達されてきた。したがって記憶の訓練はイスラームの確固たる伝統である。確かにその訓練は、一方的な教えの盲目的反復という側面があり、権威の内面化によって批判的、懐疑的な精神の成長を阻む伝統という意味でも理解されてきた⁴⁶⁾。だが、ペンもノートもない中で『巻き貝』の物語を「日記」の形で再構成すること可能にしたのは、世俗主義的な作家がイスラーム主義者からクルアーンの暗記法を学び、クルアーン以外の事柄にまで応用したからとされる。主人公はイスラーム主義者の仲間とともに、まるでテープレコーダーのような技術を身に着けたとして次の

ように回顧する。

この大部屋でクルアーンを最初から最後まで暗記しない者はいなかった。新人がくれば、新たに授業が始まったが、後に別の方向にも発展していった。クルアーンや預言者ムハンマドの言行録を暗記するだけでなく、収監されたイスラーム主義運動関係者の名前を集めた「名簿」とも言うべきものを暗記する青年が選ばれた。共同房には、まだ20歳にも満たない若者がいて、囚人の名前、市町村名、入所日、境遇など3万件以上の名前を記憶していた……私はこの方法を気に入り、自分でも訓練するようになった。必要な能力が身についたところで、この日記を書くことにした。頭の中で文章を書き、それを繰り返し、記憶し、また書き出し、記憶するのだ⁴⁷⁾。

小説において、主人公は拷問官に「自分はムスリムではない」と何度も強調し、大多数の囚人と区別するよう意図的に促すものの、獄中生活の中でムスリム同胞団員の政治囚も一枚岩ではなく、多様な人間であることにも気づいていく。この点は別稿ですでに述べたので詳細には入らないが⁴⁸⁾、そもそもパルミラ監獄の中で世俗主義的な反体制派囚人が収容されていた部屋は45房以上の中で1～2房しかなかったことは注意すべきである。となれば、囚人の最大多数であったシリアのムスリム同胞団員の中で、より開放的で知性的な精神を有した者にとってパルミラ監獄はいかなる意味を持っていたのか。それを部分的にでも知る鍵がバッロの『ギロチン台』にある。

III. シリアのイスラーム主義者手記にみる絶対的監獄の諸相

1. 「宿敵」からの考察

カール・シュミットは『政治的なものの概念』の1963年版序文にて政治の本質的性質として友・敵の峻別を挙げつつ、敵の中でも殲滅すべき「悪

魔的敵」(foe)あるいは「宿敵」の存在について「世俗的敵(enemy)と並んで再び使用されている」⁴⁹⁾と指摘した。この概念的枠組みを借りるとするならば、ハーフェズ・アサド政権にとって自らの権力基盤を揺るがしかねない「宿敵」はふたつあったと言える。

ひとつはアサド政権によって「バアス党右派」と呼ばれた1963年のクーデター以来バアス党政権を担ってきたミッシェル・アフラク(1910-1989)をはじめとする集団である。1966年に追放されハーフェズ・アサドとの政争にも敗れたこの集団の有力幹部はイラクに亡命したが、そのメンバーは1970年代後半以降にも拘束され400名程度が政治囚となった⁵⁰⁾。この反アサドのバアス党勢力はやがて「宿敵」と呼べる規模ではなくなったが、その一方でもうひとつの「宿敵」であるシリアのムスリム同胞団は1970年代を通じてハマやアレppoなど一部の都市で着実に支持基盤を固めていた。

確認すべきは1960年代初頭までシリアのムスリム同胞団はエジプト本部の分権主義的方針の下、シリアの議会政治という枠組みの中で政治的な存在感を示してきたことである。著書『イスラーム社会主義』で一世を風靡したカリスマ的理論的指導者ムスタファー・シバーイー(1915-1964)を中心に1949年選挙では4人、1961年選挙では10人ほど国民議会議員を輩出した。ところが1963年のバアス党による政権奪取の後に、ハマでマルワーン・ハディード(1936-1976)をはじめとする急進派の指導者に率いられた一団が座り込みを行い、1964年の反乱へと発展していく。シリア研究者ラドワーン・ジャーデの言う通り、この反乱は「ムスリム同胞団内におけるジハード主義の台頭を示す最初の兆候」となり、やがて1982年のハマ事件を引き起こすムスリム同胞団系列の武闘派「戦闘前衛隊」を生み出す契機となった⁵¹⁾。

『ギロチン台』の著者バッロは17歳であった1980年5月、シリアのムスリム同胞団の機関誌であった『警告』誌を回覧した罪で、1歳年上の仲間8人とともに拘束された。治安機関での拘留を経てアレppo中央刑務所で3ヶ月半、そしてパルミラ刑務所で7年半を過ごすことになる⁵²⁾。

手記の中では組織の内情に関する考察も少なくない。ハンマードは『目撃者』の中でシリアのムスリム同胞団内部における地域的、幹部同士の対立がパルミラ監獄内にまで持ち込まれたことを嘆いた⁵³⁾。バッロも同様の問題を指摘しながらも、たとえばダマスカスではムハンマド・サイード・ラマダン・ブーティー師（1929-2013）が率いる宗教勉強会の最大集団が治安当局から厚遇される一方で、その他の支持基盤の弱い集団との敵対関係を煽るようになった。いわば宗教の勉強会に過ぎなかった一部の集団が独裁政権下でさまざまな形で冷遇され抑圧されたがゆえに、最終的に同胞団から分離独立した武闘派「戦闘前衛隊」になびく者も少なくなかったと強調される⁵⁴⁾。

緊張関係はとりわけ1979年のアレppo砲兵学校事件⁵⁵⁾の後に、政権vs戦闘前衛隊との明確な対立、さらに同胞団すべてを巻き込んだ熾烈な抗争に発展していくが、バッロに言わせれば「治安機関は武装闘争や体制との衝突から戦闘前衛隊とムスリム同胞団はそれぞれ別組織だと最初から分かっていた」⁵⁶⁾。1980年に入るとムスリム同胞団内部では政権崩壊への期待感が高まる一方で、ハーフェズ・アサドは「われわれの側に与さない者はみな敵だ」と友・敵の峻別を明確にし、「イスラエルの手先」や「キャンプ・デービッド合意の支持者」といったものはや荒唐無稽な言いがかりを同胞団にかけるようになったという。同年6月に政権はパルミラ監獄内で推定700人～2000人に及ぶ同胞団員の虐殺に及び、7月に「同胞団への所属が明らかになった者は皆死刑に処す」と定める法律第49号をも発布した。シュミットやアガンベンが論じてきたように、まさに法の「停止」を法制化する、あるいは決定を下す主権者が法を宙吊りにし、永遠の「例外状態」を作り出す。かくしてパルミラ監獄は法的保護の外側において「剥き出しの生」⁵⁷⁾に対する生殺与奪を管理された象徴的な場となったと考えられる。

2. イスラーム主義者が語る「剥き出しの生」

ムスリム同胞団員は法律第49号による処刑者の対象となったが、実際の処刑の光景は、世俗主義的左派であり合法的な殺戮の対象ではなかったハ

リーファの小説『巻き貝』で「野獣」と呼ばれる処刑官による極めてグロテスクな描写を通じて語られる⁵⁸⁾。だが一方で、その当事者となったハンマードやバッコの手記には処刑に至るまでの形ばかりの「審理」などに関する描写はあっても処刑そのものに関する描写は少なく、あったとしても死刑に処された者に何らかの形で深く接した別の証言者の発言を断片的に伝えるのみである⁵⁹⁾。というのも、そもそもパルミラ監獄では多数のイスラーム主義者が連日処刑され「死人に口なし」の状態となっている、あるいは、たとえ処刑を免れ生き延びたとしてももはやほぼ再起不可能の別人に変えられているからであろう。かくして『ギロチン台』の冒頭は自らの「生まれ変わり」を意図して、次のように綴られている。

想像力を自然な流れにゆだねると、必ずパルミラ監獄の最初の瞬間に導かれる。1980年夏、恐ろしい刑務所の門に入った瞬間だ。鉄の門は非常に狭く、黒く、汚く、錆び、汚れがたまり、惨めな形となり、死のにおいを発していた。黒い扉の右側にはもともと白だが黄ばんで汚れたプレートがあり、下手な字で「入った者は死に、出た者は生まれ変わる」と書いてあった⁶⁰⁾。

重要なのは、別の人間になって出獄するまでまさに「生かさず殺さず」、すなわちアガンベンがホモ・サケルを例に言うところの「剥き出しの生」（殺害可能でありながら犠牲者として尊重され得ない生）の状態に置かれたという点である⁶¹⁾。それは『ギロチン台』の序章から象徴的に描かれる。バッコによれば、アレppo中央刑務所からパルミラ監獄に100人ほど連行された後、「歓迎会」と呼ばれる拷問を7時間も受け続けた際、わずかな反抗心を示した同志ハルドゥーンが殴打の末に殺されてしまった。ところがその後刑務所長が訪れ、拷問死した事実を知り、その下手人たる看守に対して「次同じことを繰り返したらお前を丸坊主にしてやる。出ていけ!」と激怒したという⁶²⁾。

最低限の生命維持のために毛布や一日3回なけなしの食事などは与えられ、皮肉ではあるが、大部屋に戻れば少なくとも数時間は拷問を免れるのだから「まるで家に帰って落ち着いたような気分にもなる」とバッロは回想する⁶³⁾。だが入獄1か月前の法律第49号の発出によって処刑が「合法」化され、弾圧が最高潮を迎えた1982年冬の「黒い水曜日」には所内の刑場でわずか1時間半で185人が粛清されたこともあったという⁶⁴⁾。

看守や拷問官についてもパルミラは別格である。シリア国内の別の刑務所であれば暴力を振るわれる可能性がありながらも同時に共に遊戯に興じるような、状況によってはコミュニケーションの余地は存在した⁶⁵⁾。ところが、パルミラ監獄では看守は「もともと最も汚く、攻撃的で、倫理観に欠けている者から選ばれ……犯罪に手を染め、堪能し続ける人間に変わってしまう」⁶⁶⁾。政権基盤のアラウィー派コミュニティの最下層から、教育を受けていないが筋骨隆々の血気盛んな若者（猛者）が拷問役に選ばれ、徐々に暴力に慣れさせる。ときには自らの手で「悪魔的な敵」たる囚人を殺害させることによって人間としての一線を超え、つまり理性の歯止めを崩壊させてきたという⁶⁷⁾。

ナチ収容所の生還者アメリーはかつて「どこであれ、現実が圧倒的にのさばり返るとき、言葉は眠りにつく」として、「精神の限界」の中で言葉そのものへの懷疑が生じたと証言した⁶⁸⁾。パルミラを経験したバイダクダールも同じく『言葉と沈黙の裏切り』で「ある時点で、言葉を裏切るこの不正が起こった／だが沈黙はそれ以上の不正であり、裏切りであったし、あり続けるだろう」⁶⁹⁾と経験の表象不可能性について語るが、バッロもまた死期を意識する心境について次のように語る。「まもなく死ぬと分かっているとすれば、その時の気持ちを説明することは難しい……人間の生活の中で何度も繰り返されることはなく、多くの人にとって起こりもしない瞬間だ」。とはいえ、いっそう重要なのは、拷問を待つ時間の恐怖感、2週間に4回程度しか許されない「外気浴」⁷⁰⁾に加え、連日続く「拷問ための拷問」によって精神的、肉体的にも疲弊する中で、「むしろ殺してほしい」と望むようになると

いう点である。「死、老年、不能、剥奪にいたるまで恐怖には多くの種類がある。ただしパルミラでは純粋な痛みに対して恐怖を感じるが、純粋な願いは死ぬことだ」⁷¹⁾。

バッロは8人の同志とともに拘束されたが、その同志は拘束後2年以内にみな拷問死するか、処刑された。バッロもまた一人当たり1分にも満たない一方的な「審理」において即座に死刑が宣告されたが、当時17歳、すなわち18歳に満たなかったために後日10年の禁固刑に減刑されたという。この恩着せがましい「再審理」について次のように回想する。

私の友人は処刑され、私だけが生き残り、毎日ひどい苦痛を食らうというのか。減刑を嘆くべきか、それとも絞首台から逃れたことを喜ぶべきか。囚人らが莫大な金〔賄賂〕を無駄に費やしているこの判決の変更が、私にとって呪いだったと、将来伝える人々は理解してくれるのだろうか。私が何年も生き残れば、死よりも何倍も辛い煮え湯を飲まされることになるのだろうか⁷²⁾。

バッロは毛布の生地をほどいてひそかに縄を結び、自ら首を吊ろうと試みるものの、突如父親が日ごろから語っていた自殺を戒める言葉を思い出し、死のうにも死にきれなかったという。

さらに興味深いのは、感染症などの病気においても管理の下でしか死ぬことができなかったという現実であろう。拷問で疲弊しきっていることに加え、何百人が密集している場で、コレラや疥癬、結核が広がっても隔離や予防措置を講じる可能性がない。結核が蔓延した際には連日のように数10人単位で死体が生じることもあった。「治療の可能性を完全に失い、感染を感染させるうっ血、患者を急速に殺し、抵抗力を弱める素因となる栄養失調、および拷問に次ぐ拷問で日々疲れ切っている。かくして簡単に死の病に侵される」⁷³⁾。この記述だけみれば、政権側は自らの手を煩わせずして宿敵を大量に「処分」できるのだから、ナチスの収容所と同じ経済効率を重んじる

資本主義的な精神と一致すると考えられるだろう。ところがバッコは1981年4月にコレラが広まった際に犠牲者が増え続けた日々を次のように振り返る。

看守らは10人、20人と死のうが気にしないし、その倍の人数を処刑しているのは確かだ。だが、自分たちの管理を離れて多数が死ぬのを許さない。自らの殺害欲や復讐を果たすためでしか、死や殺害を望んでいない（傍点、引用者）⁷⁴⁾。

主従関係を教えることのみが自己目的化した場で、囚人は生きることだけでなく死ぬことも許されない。まさにクルアーンで言及される現世と来世を隔て魂を留ませる「間」（バルザフ）、あるいはアガンベンの言うところの「互いに互いを決定しえないでいるような未分化の領域」たる「^{いき}闕」⁷⁵⁾に置かれるのである。だが、かかる極限状況にも長きにわたって耐え、最終的に「生還」できたのはなぜだろうか。そしてバッコは、自らの生還にいかなる意味を見出したのであろうか。

3. ふたつの「公正」と「救済」

レーヴィは次のように指摘する。「選別や空襲といった危機の時期だけでなく、すり減らすような毎日の生活の中でも信仰のあるものたちはより良く生きてきた……それがいかなる信仰であろうと、宗教的なものでであろうと政治的なものでであろうと、関係なかった」。レーヴィはキリスト教徒やユダヤ教徒の聖職者であろうと、無邪気なマルクス主義者であろうと「救済をもたらす力によって鋭く結ばれていた」⁷⁶⁾と観察する。

かかる観念はパルミラ刑務所に長期に収監されたイスラーム主義者の手記においても繰り返し強調されている。ハンマードは、あまりに過酷な抑圧の中でクルアーンに記されている《汝らがアッラーに助力すれば、アッラーは汝らを助け、足場を堅固にする》(47-7) という章句を信じることができな

くなり、秘密裏に行われていた礼拝への参加を拒否する者いたと回想する。とはいえ他の者は、このような逸脱者の心情に理解を示しながらも、アッラーが彼を正しく導くよう深く祈り、自ら生き延びていることに関し、すべての思考と集中力を、最も気高く、最も慈悲深いアッラーに向け、ただひたすらひれ伏したという⁷⁷⁾。すなわちハンマードにとって獄中を耐え抜く精神的な支えは深き信仰心であることは疑いない。

獄中で過ごす日々は、神が私たちに書き残した運命の一部であり、私たちの人生の一時的な局面であり、自由か死かのどちらかで終わるに違いない。可能な限りクルアーンを学び暗記すること以上に、われわれがいっそう高貴となる行為はない。アッラーがわれわれに死を望まれるのであれば、現世の最後の時間をこの神聖なる書物とともに過ごすことになるだろう⁷⁸⁾。

当然ながら、この点にはバッコも同意している。バッコは偉大な神秘主義者が「己が魂から神に向かい、神から人類への再び下降する一つの流れ」を感じつつ、自らに立ちはだかる「物理的障害〔山〕をそもそもみることはない」という、ベルクソンの『道徳と宗教の二つの源泉』における考察に着目する⁷⁹⁾。この「生の躍動」(élan vital)と結びついた深い信仰こそが、「過酷さが人間の耐えることのできる限度を超えてしまうこの地獄におけるわれわれの状況を正確に説明」しており、極限状態への耐性を強めたことは間違いないというのである。とはいえバッコの証言において興味深いのは、深い信仰とともに同時に自らの苦悩の経験に意味を見出す重要性をも強調している点であろう。

パルミラの囚人は、〔経験の〕意味を見出し、この地獄での生存を正当化する。そのひとつは天啓の公正さに対する信念であることは疑いない。だが、もうひとつは自ら苦しめられた問題をめぐる公正さである。抑[・]庄[・]

者に立ち向かい、この人間の存在にふさわしい自由を要求するという意味での公正さである（傍点、引用者）⁸⁰⁾。

宗教者が過酷な弾圧に耐え忍ぶ力を養っていることは、信仰深き本人だけではなく、監獄で共に過ごした世俗主義的な作家によってもしばしば言及されてきた。病氣や老齡の者の肩代わりとなって鞭打ちの拷問を自発的に受けた「フィダーイーン」⁸¹⁾ に対して、サーレハやハリーフアといった左派作家は人間的な意味で尊敬の念を抱いてきた⁸²⁾。ところが本稿冒頭でサーレハの指摘を引用したように、イスラーム主義者が監獄経験を語るとなると、つまるところ予定調和的な「アッラーの計画」に還元され、「個性のない物語」に終始してしまう。だがバッコの証言で注目されるのは、あくまでふたつの公正と救済を求めているという点である。そのひとつはアッラーの公正さとそれによる救済であることは言うまでもない。だが、ムスリムはアッラーのために生きているにせよ、それと同時に現世で受けた苦悩から自らを解放すべく、もうひとつの公正をこの現世において実現することによって、自らの手によって自らを救済する方途を模索していると、バッコは断言する。

イスラーム主義者の行為主体性から「絶対的監獄」をとらえ直すとき、それまで知られていなかった監獄内部での営みが露わとなり、彼らに対する固定観念はさらに打ち破られる。たとえば連日の拷問や天窓からの絶えざる監視にもかかわらず、四方の壁に4人が耳を当て、別の1人が戸の隙間から看守の動きを監視しながら、共同房の最も見えにくい端の空間にて演劇の発表会が月1回のペースで行われていたという。下着に織り込まれた黒いゴムを燃やして水に溶かして灰を作って口ひげやあごひげを描き、『ジャーヒリーヤ時代のアラブ』といった演目を上演していた。それは、「縛ることなどできない想像力を生み出し、より広い空間への窓」⁸³⁾ となったとされる。

レバノン系オーストラリア人研究者ガッサン・ハージはイスラエルの占領下で暮らすパレスチナ人の生活において社会的、心理的な疲弊をもたらすレジスタンスだけでなく、あえて占領の事実から距離をとり意識的に「どこに

でもある日常」に埋没することによってレジリエンス（回復）の幅を広げてきたと指摘する⁸⁴⁾。バッコも認める通り、拷問の最中に敢えて叫び声を上げず、なけなしの抵抗を示すことはある。だが、そもそも抵抗など不可能な空間の中で目の現実を敢えて意図的に忘れ、「別の自分」を想定することで、人間的な営みの回復を図ろうとするのだろう。

さらに言えば、こうした機会は、「笑い」によって補強される。バッコは『薔薇の名前』（ウンベルト・エーコ）の最終場面で修道士がキリスト教史において神聖視されているものを「笑い飛ばす」こと、すなわちユーモアの重要性を示唆した点に触れつつ、監獄内でもアラビア語で「ヌクタ」と呼ばれるジョーク、あるいは「スフリヤ」と呼ばれる皮肉は、人間性の回復に重要な役割を果たしたと述べる。アブドゥルナーセル時代の「何でも国有化」政策のバカバカしさなどがネタとなったとしつつ、「笑いとそれがもたらすものは、抵抗と教育の手段であり、これは抑圧的な政権と傲慢な人々を毎朝嘲笑し、悪行を暴露する風刺画に明らかだ」⁸⁵⁾ というのである。

絶対的監獄には筆記用具もなければ、書物の差し入れなどは一切認められていない。ところが、バッコらは小さな布にビニールを詰めて固くしたものから水で消せるチョークのようなものを作り出し、まるで水性ペンのように活用していた。ハンマードも証言しているが、ボードや自作の小冊子にはイブン・マリークのアラビア語文法書（Alifīyya）や、イスラーム法学上重要な相続論（Al-Rahḥīyya）、ハディース学の著作（Al-Bayqūnīyya）など中世イスラーム学の名だたる書物の一節が書かれ、勉強会が開かれていたという⁸⁶⁾。ただしバッコによれば、一部の囚人は自らの読書の記憶を頼りに、ナギーブ・マフフーズの『街区の子どもたち』やユーセフ・イドリースの上エジプトの旅物語、ドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』といったアラブ内外の小説に加え、パレスチナの国民的詩人マフムード・ダルウィーシュの長編詩『アフマド・ザアタル』などを物語ったという⁸⁷⁾。フィクションである『巻き貝』においてこのテープレコーダーに似せた記憶術に関する描写には現実からすれば明らかな誇張があることは否めない。だが、バッコ

の証言からして、視覚が支配されていたとしても、それを補うための聴覚による文化活動や記憶によって、「どこにでもある日常」を取って取り戻すための余地を確保しようとしていたと考えられる。

4. エキュメニカルな枠組み

文化活動の広がり、そして物語は決してイスラーム主義者のみによって共有されたわけではない。バッロはパルミラ監獄の中で世俗主義的な反体制派囚人との交流は制限されてきたものの、結核の蔓延によって部屋を移されたことが、新しい知見を開く契機になったとも証言する。

結核によって部屋に移ることは、日々のルーティーンを打破し、新しい人々と会う空間となった。最初から知らなかったとしても、みなアサド政権下の囚人という大家族の一員であり、痛みや関心を多く分かち合っている。これまで知り合いではなかったこと以外になんら障害となるものはない。それぞれが物語を紡ぎ、断たれた輪をつなぎ、大きく長い物語の重要で際立った各章を構成している⁸⁸⁾。

シリア人ではないハンマードの経験談において、反体制派バアス党員の囚人は私利私益しか考えておらず、ムスリム同胞団員を敵視し、看守側に密告する連中とされる。また反体制派の共産党（シリア共産党行動派やシリア共産党「政治局」）員は、中庭での休憩や喫煙、長髪、料理、定期的な面会をも許され、拷問や処刑も免れて「甘やかされていた」と非難される⁸⁹⁾。その一方で、『巻き貝』において世俗主義的な主人公は同部屋では自分一人が非ムスリムで、「完全に仲間はずれにされ、常に脅かされている状態」であった。周りから体制側のスパイとみなされた主人公は、日々自身に対する憎悪を感じながら、心許した極少ない同部屋の囚人にさえ、「君は善人だと思うが……この部屋には過激な者がいて、不信心者（カーフィル）をどこでも殺すことが義務だと考えている」⁹⁰⁾と忠告される。

とはいえ『巻き貝』において興味深いのは、世俗的な主人公は殻に閉じこもっていたにもかかわらず、長い共同生活の中で過去の自分とは変わっていったという点である。獄外の記憶が徐々に退く中で、主人公は獄内の日々のディテールに埋没し、クルアーンの章句も完璧に暗記し、処刑の犠牲者を共に弔い、気の許せる仲間ナシームとも出会い、同性愛的な感情さえも抱くようになる。「新しい人間関係が生まれ、人々は派閥的なものからどんどん遠ざかっていく」。もはや過去に所属していた政治的な組織などはどうでもよくなり、「牢獄は、自分たちが生きてきた大きな嘘を発見するために必要だった。どんな愚かさ、どんな夢が私たちをここに連れてきたのか」、とさえ問いかける⁹¹⁾。

新しい関係性を考えるうえで、パルミラ刑務所におけるタクフィール主義をめぐるバッコの見解は注目される。本家エジプトのムスリム同胞団の理論的支柱であったサイイド・クトゥブがタクフィール主義思想の持主であったことはよく知られている。《アッラーの啓示によって判断しない者は、不信仰者（カーフィル）である》（5-44）。クルアーンのこの有名な章句は、現在のムスリム社会をイスラーム以前のジャーヒリーヤ時代として位置づけるクトゥブに何度も引用された⁹²⁾。信仰なき者に対してレッテルを貼る、断罪するようなかかる立場は、タクフィール主義と呼ばれる。

バッコによれば、こうしたタクフィール主義の思想は、パルミラ監獄第22号房でヤシャール・シャウカという囚人を中心に一時期広まったという。彼らはアサド政権下のモスクをジャーヒリーヤ時代の制度とみなし、秘密裡の集団礼拝に関しても他のイスラーム主義者とは距離をとるようになったという。つまり、彼らにとってアサド政権は他のアラブ諸国の体制と同じく不信心者の集団に他ならない。とはいえ、理性を少しでも働かせてみれば、政権中枢部が信心深い者によって担われれば、専制政治が収まるとは誰も想像できないだろう。

興味深いのは、バッコが「こうした考え方は決して第22号房以外に広がり、根付くことはなかった」としながらも、「おそらくこの理由は一般的な

シリアのムスリムを特徴づける柔軟なシャームのイスラームの構造によるものだろう」と指摘している点である⁹³⁾。「歴史的シリア」(現在のシリアとレバノンに加え、パレスチナとヨルダンの北部を含む)と呼ばれるシャーム地方は多様な宗教・宗派が共存しあう歴史を育んできた。レバノンには17の公式の宗派があるが、シリアもまたスンナ派住民が人口の6割を占める一方で、アラウィー派やシーア派、ドゥルーズ派、キリスト教徒、さらにクルド系と多様な背景を有した住民によって構成されている。キリスト教徒マロン派とイスラーム教徒ドゥルーズ派の騒擾事件(1860年)などコミュニティ同士の対立が近現代を通じて幾度となく生じ、レバノンやシリアの「内戦」の一因ともなってきたことは否めない。とはいえ、思想家ブトルス・ブスターニー(1819-1883)が共通基盤としての「祖国愛」を提唱し、シャーム地方の各都市ではさまざまなコミュニティや信条を持つ集団がカクテルのように共生するなど、異質な存在との共存や相互の尊重、すなわち歴史家ウサーマ・マクディシーが言うところの「宗派横断的(エキュメニカル)な枠組み」が歴史的にも蓄積されてきた⁹⁴⁾。

『目撃者』においてはパルミラ刑務所の看守や拷問役の幹部クラスがその方言からアサド政権と同じ地中海沿岸部のアラウィー派コミュニティの出身者であることが明らかだと幾度となく強調される。それは事実としては間違っていないのだが、たとえば世俗的な左派の反体制派組織や国民的な作家や映画監督といった有識者層も人口比率以上のアラウィー派コミュニティ出身者によって構成されていると、シリアの作家によってしばし強調される⁹⁵⁾。国家創設と近代化の課程で教育や軍に多数関わった同コミュニティの出身者が必ずしもアサド政権の盲目的な支持者になるわけではない。かかる多様性を包摂する「日常のリズム」と結びついた「シャームのイスラーム」がパルミラ刑務所のイスラーム主義者の間でも垣間見られ、後のアルカーイダなどのグローバルなタクフィール主義やサラフィー・ジハード主義者の潮流とは一線を画したと、バッロは確認するのである。

IV. 小括：意味のレジリエンス

2011年のシリアにおける抗議運動の展開、その後の激しい弾圧を経て、拘束を経験した者は約120万人に及び、2019年の時点で勾留中とされる者は約12万から13万人と推定されている⁹⁶⁾。治安当局者によって国外に持ち出されたシーザー・ファイルによって勾留中に殺害された2万8千人以上の写真が公開され、国際世論を驚愕させたことも記憶に新しい。1980年代のパルミラ監獄における拷問や処刑もビデオで記録され、大統領官邸に提出されていたとバッコは語るが⁹⁷⁾、かかる大量殺戮が独裁政権による緻密な管理・規律化の下で実践されてきたことは疑いない。サーレハが「シリア全体のパルミラ化」と言う通り、パルミラ監獄は決してシリアの局部的状況ではなく、国全体を象徴的に示す暗部であり続けた⁹⁸⁾。ガリユーンが認める通り、異なる意見の持主を一切認めない「絶滅戦争」⁹⁹⁾がロシアのプーチン政権を後ろ盾にして続いていることは疑いない。

とはいえ、元同胞団員バッコは数々のテレビ・インタビューや主著『ギロチン台』を通じて、パルミラ監獄の経験を語り続けることにいかなる意味を見出したのだろうか。彼の動機のひとつと考えられるのは、〈意味のレジリエンス〉であろう。独裁政権下で味わった苦悩と死は、結婚式の祝砲の流れ弾に当たるような「無駄死に」とは全く別物だとして、バッコは次のように語る。

意味は依然として中心的な課題であり、この苦しみに対応する上で本質的に重要である。というのもこの痛みと苦しみを説明することで、抵抗力と適応力を高めるからだ。それは、敬虔な信者がアッラーの試練を喜んで受け入れることに限りなく似ている。主とそれに使える者との関係を明確に示すムスリムの形でもある……同じく、革命家と抵抗者、さらには反対勢力が自身の立場の結果を負い、おそらく死をも受け入れるという意味もある。これは専制的な権力に対する批判を通じて、収監と

拷問の経験の意味を求めて意識を選択するという気高い立場である¹⁰⁰⁾。

バッロがかかる「ふたつの救済」の見地にたどり着く際に、ひとつのヒントを与えたのがアウシュヴィッツの生還者で代表作『夜と霧』で知られるオーストリアの精神科医ヴィクトール・フランクルであったことは興味深い。アウシュヴィッツで20人に1人とされる生還者の中には生き残ったことへの罪の意識を背負い、生きる意味を見失いがちな者も少なくなかったことは、フランクルやレーヴィなどに指摘されてきた。だが、フランクルは自ら「ロゴセラピー」と呼ぶ方法にて、人間に無駄な苦悩などひとつもないのであり、求められるのは「無意味さではなく無力さに耐えることだ」と常に説いてきた。その際、超越的な存在のみに自らをゆだねる「汎決定論」は、「まさに彼ら自身の信仰の基盤をむしばんでいるのだということに気づいていない」、「神を認めるか認めないかは、いずれも人間の自由な決断にかかっている」とも強調した¹⁰¹⁾。

フランクルにも影響を受けたという開けた精神を持つイスラーム主義者バッロは、パルミラ監獄で処刑される前の同志の様子などテレビで回顧した際に、その同志の兄弟や母親から最後の瞬間を語ってくれたことに関して深い感謝の意を涙ながらに電話で受け取ったという。それは犠牲者にとっても、そしてバッロにとっても一種の救いであり、癒しであっただろう。死刑を免れた際に「むしろすぐにでも殺されたい」と望んでいたバッロは、決して「汎決定論」に陥ることなく、パルミラ監獄の経験を語り続けることで苦悩、そして生き残ったことの意味を問い続ける。

「パルミラ監獄から生還した者が、看守に対して復讐を果たしたという事件はないし、個人的な恨みを何ら抱いていない」とバッロは言う¹⁰²⁾。アメリカの考察を見てもルサンチマンをめぐるのは生還後も簡単に「ケリを付ける」ことができないほど極めて複雑な心情を抱き続けることから¹⁰³⁾、バッロの証言を文字通り受け取ることは難しい。とはいえ、バッロにとって復讐の対象は決して個人ではなく、シリアを現在の悲劇に巻き込んだ権力者や

内外の巨大な抑圧の構造であることは明らかである。その意味でサーレハが強調したように、かつてのバスチーユ監獄やアウシュヴィッツ収容所と同じく人間が人間であることを放棄させた恥辱の場、国民の「悔恨の記念碑」¹⁰⁴⁾として来るシリアの人々に長く語り継ぐべきだと、 barro もまた断言するのであろう。

注

- 1) ファラジュ・バイラクダール (1951-) : シリアの詩人、ジャーナリスト。1987年にシリア共産党行動派への所属容疑で拘束され、治安機関のパレスチナ局に1年間、その後パルミラ刑務所で5年間、サイドナーヤ刑務所で2000年末まで収監された。代表作に『言葉と沈黙の裏切りーシリアの軍事刑務所での疎外経験ー』(2006) など。
- 2) シリア人女性映画監督ハーラ・ムハンマドの記録映画『記憶への旅』(*Rihlat ilā al-dhākira*, 2006) に登場したバイラクダールが語った言葉。この作品はファラジュ・バイラクダールとガッサーン・ジバーイー、ヤシーン・ハージュ・サーレハのシリア人作家3名がワゴン車でパルミラまで向かう道すがら、パルミラ監獄の経験について語り合うという筋立てとなっている。
- 3) ヤシーン・ハージュ・サーレハ (1961-) : シリアの政治エッセイスト。代表作にサーレハ、ヤシーン・ハージュ『シリア獄中獄外』岡崎弘樹訳、みすず書房、2020年など。
- 4) サーレハ『シリア獄中獄外』、p.82.
- 5) 代表的な報告書として Middle East Watch, *Syria Unmasked: The Suppression of Human Rights by the Asad Regime*, Yale University Press, 1991 などを参照。
- 6) サーレハ『シリア獄中獄外』、p.192.
- 7) サーレハ『シリア獄中獄外』、p.192.
- 8) Barro, Muḥammad, *Nājin min al-maqṣala: Thamāniya a 'wām fī sijin tadmur*, Jusūr lil-tarjamat wa al-nashr, 2021.
- 9) Ghaliyūn, Burhān, "Taqdīm bayna 'abath al-tārīkh wa makru-hu", In Barro, Muḥammad, *Nājin min al-maqṣala*, pp.15-23.
- 10) 宮地尚子『環状島＝トラウマの地政学』みすず書房、2007.
- 11) サーレハ『シリア獄中獄外』、p.245.
- 12) ナビール・スライマーン (1945-) : タルトゥース県サフィータ市の出身でダマスカス大学アラビア語科を卒業後、1963～1979年にアラビア語教師、ラッカ市

- で校長も務めていたが、1989年以降に作家業に専念した。
- 13) イブラヒーム・サミュエル (1951-) : シリアの短編小説家。1977～80年に収監生活。88年に最初の短編小説集『重い足取りの匂い』を出版後、2002年までに4つの作品集を発表。
 - 14) ガッサーン・ジバーイー (1952-2022) : シリアの劇作家。バアス党アフラク派に属していたために1982年に拘束。治安局地下牢で1年半、その後パルミラ監獄で4年半、サイドナーヤ刑務所で残りの期間を過ごし、1992年に釈放された。代表作に『バナナの指』(1994)など。
 - 15) シリアの監獄文学に関しては、岡崎弘樹「監獄としての〈ワタン〉—シリアにおける監獄文学の変遷」、岡真理編集『現代中東の「ワタン（祖国）」の心性をめぐる表象文化の発展的研究』成果報告書』、pp.69-82 ; Taleghani, R. Shareah, *Readings in Syrian Prison Literature: The Poetics of Human Rights*, Syracuse University Press, 2021; Cooke, Mariam, *Dissident Syria: Making Oppositional Arts Official*, Duke University Press, 2007などが代表的。とはいえ、パッロの『ギロチン台から生還者』を学術的に研究する論考としては筆者の知る英仏日アラビア語圏において本稿が初と思われる。
 - 16) Ḥammād, Muḥammad Salīm, *Tadmur... Shāhid wa mashhūd: Mudhakkirāt mu'taqal fī sujūn al-asad*, Markaz al-dirāsāt al-sūrīyya, 2006; なお英訳として Muhammad Saleem Hammad, *Tadmur: Witnessed & Observed*, trans. the Syrian Human Rights Committee, <https://www.shrc.org/en/?p=29107> を参照。
 - 17) Bayraqdār, Faraj, *Khiyānāt al-lughat wa al-ṣamut: Taghribātī fī sujūn al-mukhābarāt al-sūrīyyat*, Al-Jadīd, 2006.
 - 18) Khalīfā, Muṣṭafā, *Al-Qawqaw'a: Yawmiyāt mutalaṣṣiṣ*, Beirut : Dār al-ādāb, 2008 ; Khalifa, Mustafa, *The Shell: Memoirs of a Hidden Observer*, trans. Paul Starkey, Massachusetts : Interlink Pub Group Inc, 2016.
 - 19) さらにモニカ・ボルグマン (Monika Borgmann) とルクマーン・サリム (Lokman Slim) による再現ドキュメンタリー『タドムル』(Tadmor, 2016) もある。
 - 20) 岡崎弘樹「監獄としての〈ワタン〉—シリアにおける監獄文学の変遷」を参照。なおアウシュヴィッツを生き延びたプリーモ・レーヴィも自らの監獄記に関して「告発条項を並べるために書かれた」わけではなく、「むしろ人間の魂がいかに変化するか、冷静に研究する際の基礎資料」と述べている (レーヴィ、プリーモ『アウシュヴィッツは終わらない これが人間か』竹山博英訳、朝日新聞出版、2017年、p.5)。
 - 21) 記録映画『記憶への旅』におけるジバーイーの発言。
 - 22) 「タイヤ責め」とは、収監者を丸めてタイヤに押し込め、手を後ろで縛り、両足を釣り上げる拷問の方法。執行人は鞭や棍棒、ケーブル (捻られた電気コー

- ド)で勾留者の土踏まずを打つ。
- 23) 「空飛ぶ絨毯」責めとは、直角に折り曲げられた木板に、体を逆さにして頭が浮いた状態で、両手両足を縛られ、暴行を加えられる拷問。
- 24) 「ドイツ製椅子」とは可動式の拷問椅子。囚人は腕と足を縛り付けられるが、背もたれを倒すと上半身が引っ張られ、胸と背中にとてつもなく圧力がかかると思われる。
- 25) Hammād, *Tadmur*... p.42.
- 26) 再現ドキュメンタリー『タドムル』におけるレパノン人元収監者の発言のほか、ほとんどの手記で同様の事実は報告されている。
- 27) Hammād, *Tadmur*... p.69, pp.73-74.
- 28) Hammād, *Tadmur*... pp.74-76.
- 29) Hammād, *Tadmur*... p.113, pp.169-170.
- 30) なお、ハンマードによれば1982年のハマ事件の最中では「審理」は2日に1回ペースとなり、大量の数の絞首刑が実施されたという。
- 31) アメリー、ジャン『罪と罰の彼岸－打ち負かされた者の克服の試み』池内紀訳、みすず書房、2016年、p.66.
- 32) Šāliḥ, Yasīn al-Hājj, *Al-Faṣṣa' wa tamthīlu-hu: Mudāwalātun fī shakl sūriya al-mukharrib wa tashakkuli-hā al-'asīr*, Mu'ssasat dār al-jadīd, 2021, pp.52-53, p.83.
- 33) Ghaliyūn, “Taqdīm bayna ‘abath al-tārīkh wa makru-hu”, pp.17-18.
- 34) Hammād, *Tadmur*... pp.65-66; サーレハ『シリア獄中獄外』、pp.66-67.
- 35) Hammād, *Tadmur*... p.59. とはいえ、ハンマードによれば1983年3月頃から看守の前で目を開け、頭を上げることは許されるようになったという。Hammād, *Tadmur*... p.126.
- 36) フーコー、ミッシェル『監獄の誕生－監視と処罰－』田村俣訳、新潮社、1977年、pp.203-204.
- 37) サーレハ『シリア獄中獄外』、p.216.
- 38) Hammād, *Tadmur*... p.136.
- 39) アガンベン、ジョルジョ『アウシュヴィッツの残りのもの－アルシーヴと証人』上村忠男ほか訳、月曜社、2001年、p.63, p.108. なお、ムスリムをドイツ語で意図する「ムーゼルマン」は、実際のムスリムではなく、ナチの収容所でまるでムスリムが礼拝しているような姿で死にかけている人々をさした差別的な隠語である。
- 40) Khalīfā, Muṣṭafā, *Al-Qawqaw'a*, p.182.
- 41) Hammād, *Tadmur*... p.79.
- 42) レーヴィ『アウシュヴィッツは終わらないこれが人間か』、p.68.
- 43) Khalīfā, Muṣṭafā, *Al-Qawqaw'a*, p.14.
- 44) Khalīfā, Muṣṭafā, *Al-Qawqaw'a*, p.36.

- 45) Šāmu'īl, Ibrāhīm, *Al-Nakhnakhāt*, Dār al-jundī, 1990.
- 46) Sharabi, Hisham, *Neopatriarchy: A theory of Distorted Change in Arab Society*, New York: Oxford University Press, 1988.
- 47) Khalīfā, Muṣṭafā, *Al-Qawqaw'a*, p.76.
- 48) 岡崎弘樹「監獄としての〈ワタン〉—シリアにおける監獄文学の変遷」を参照。
- 49) シュミット、カール『政治的なものの概念』権左武志訳、岩波文庫、2022年、p.226.
- 50) Middle East Watch, *Syria Unmasked*, p.69.
- 51) Ziadeh, Radwan, *Power and Policy in Syria: Intelligence Services, Foreign Relations and Democracy in the Modern Middle East*, I.B. Tauris, 2012, pp.136-138.
- 52) その後、ダマスカス郊外のサイドナーヤ刑務所に移送され服役期間は合計12年7ヶ月に及んだが、『ギロチン台からの生還者』はパルミラ刑務所から移送されるまでの経験について語られており、それ以後の獄中経験は別の著書で語られるべきとされている。
- 53) Ḥammād, *Tadmur...* pp.133-135.
- 54) Barro, *Nājin min al-maqṣala*, 2021, p.44.
- 55) 1979年6月16日、シリア政府軍将校でムスリム同胞団メンバーでもあったイブラヒム・ユーセフがアレppoの砲兵隊学校でアラウィー派コミュニティ出身の生徒を集めて発砲し、虐殺した事件。
- 56) Barro, *Nājin min al-maqṣala*, p.49.
- 57) アガンベン、ジョルジョ『ホモ・サケルー主権権力と剥き出しの生—』高桑和巳訳、以文社、2007年。
- 58) *Al-Qawqaw'a*, pp.201-206.
- 59) なおレーヴィもアウシュヴィッツの経験について「私たち幸運に恵まれたものは、多少の差こそあれ、知恵をふり絞って、私たちの運命だけでなく、他のものたちの、まさに溺れたものたちの運命をも語ろうと努めてきた。しかしそれは「第三者の」話、自分で経験したことではなく、近くで見聞きしたことの話であった」（レーヴィ、ブリーモ『溺れる者と救われるもの』竹山博英訳、朝日文庫、2019年、p.107）と述べている。
- 60) Barro, *Nājin min al-maqṣala*, p.31.
- 61) アガンベン『ホモ・サケルー主権権力と剥き出しの生—』、p.17.
- 62) Barro, *Nājin min al-maqṣala*, pp.32-33.
- 63) Barro, *Nājin min al-maqṣala*, p.112.
- 64) Barro, *Nājin min al-maqṣala*, p.260. 当時の国防大臣も毎週150人の処刑に関して同意の署名を行ったと自ら回想記で語っているという。
- 65) サーレハ『シリア獄中獄外』、p.40などを参照。

- 66) Barro, *Nājin min al-maqṣala*, p.159.
- 67) こうしたアサド政権の末端で暴力を担う若者は市井では「シャッピーハ」と呼ばれ、社会の末端でさまざま抑圧の下手人となった。
- 68) アメリー『罪と罰の彼岸－打ち負かされた者の克服の試み』、p.53.
- 69) Bayraqdār, Faraj, *Khiyānāt al-luḡhat wa al-ṣamut*, p.5.
- 70) 中庭に出て空気や日光を浴びる行為。
- 71) Barro, *Nājin min al-maqṣala*, p.89.
- 72) Barro, *Nājin min al-maqṣala*, p.141.
- 73) Barro, *Nājin min al-maqṣala*, p.333.
- 74) Barro, *Nājin min al-maqṣala*, pp.225-226.
- 75) アガンベン、ジョルジョ『例外状態』上村忠男ほか訳、未来社、2007年、p.50.
- 76) レーヴィ『溺れる者と救われるもの』、pp.188-189. なお同様の考察はアメリーも行っている。アメリー『罪と罰の彼岸』、pp.38-39.
- 77) Ḥammād, *Tadmur...* p.187.
- 78) Ḥammād, *Tadmur...* p.84.
- 79) ベルクソン、アンリ『道徳と宗教の二つの源泉』合田正人ほか訳、ちくま学芸文庫、2015年、pp.71-72.
- 80) Barro, *Nājin min al-maqṣala*, p.315.
- 81) 自己犠牲を捧げる者という意味だが、1970年代まではパレスチナ解放運動における「義勇兵」を指していた。
- 82) *Al-Qawqaw'a*, pp.63-64; サーレハ『シリア獄中獄外』、p.71.
- 83) Barro, *Nājin min al-maqṣala*, p.179.
- 84) Hage, Ghassan, *Alter-Politics: Critical Anthropology and the Radical Imagination*, Melbourne University Press, 2015, pp.165-172. たとえばイスラエル軍によって殉教した夫を持つパレスチナ人の妻は、幼い息子に対し毎晩占領とは無関係な、どの子どもでも喜ぶような絵本や物語を取って聞かせ、精神の回復を促すという事例が紹介されている。
- 85) Barro, *Nājin min al-maqṣala*, p.247.
- 86) Ḥammād, *Tadmur...* p.142; Barro, *Nājin min al-maqṣala*, p.185.
- 87) Barro, *Nājin min al-maqṣala*, pp.334-335.
- 88) Barro, *Nājin min al-maqṣala*, p.333.
- 89) 確かに反体制派バアス党员による密告はあったかもしれないが、前出の記録映画『記憶への旅』でも語られる通り、処刑は免れていたとしても拷問を受け、その他の生活面でもイスラーム主義者よりも優遇されていたとは考えられない。
- 90) *Al-Qawqaw'a*, pp.69-70.
- 91) *Al-Qawqaw'a*, pp.234-236.
- 92) クトゥブ、サイイド『イスラーム原理主義の「道しるべ」』岡島稔ほか訳、第

- 三書館、2008年、pp.104-110.
- 93) Barro, *Nājin min al-maqṣala*, pp.274-277.
- 94) Makdisi, Ussama, *Age of Coexistence: The Ecumenical Frame and the Making of the Modern Arab World*, University of California Press, 2019.
- 95) たとえばサーレハ『シリア獄中獄外』、pp.220-221 など。
- 96) サーレハ『シリア獄中獄外』、pp.5-6などを参照。
- 97) Barro, *Nājin min al-maqṣala*, p.143.
- 98) サーレハ『シリア獄中獄外』、p.247.
- 99) Ghaliyūn, “Taqdīm bayna ‘abath al-tārīkh wa makru-hu”, p.16.
- 100) Barro, *Nājin min al-maqṣala*, p.311.
- 101) フランクル、V.E.『意味による癒し—ロゴセラピー入門』山田邦男訳、春秋社、2004年、pp.56-57.
- 102) Barro, *Nājin min al-maqṣala*, p.221.
- 103) アメリー『罪と罰の彼岸』、pp.121-153.
- 104) サーレハ『シリア獄中獄外』、p.72.

参考文献

<日本語>

- アガンベン、ジョルジョ『アウシュヴィッツの残りのもの—アルシーヴと証人』上村忠男ほか訳、月曜社、2001年。
- 『例外状態』上村忠男ほか訳、未来社、2007年。
- 『ホモ・サケル—主権権力と剥き出しの生—』高桑和巳訳、以文社、2007年。
- アメリー、ジャン『罪と罰の彼岸—打ち負かされた者の克服の試み』池内紀訳、みすず書房、2016年。
- 岡崎弘樹「監獄としての〈ワタン〉—シリアにおける監獄文学の変遷」、岡真理編集『現代中東の「ワタン（祖国）」的心性をめぐる表象文化の発展的研究』成果報告書』、2021年、pp.69-82.
- クトゥブ、サイイド『イスラーム原理主義の「道しるべ」』岡島稔ほか訳、第三書館、2008年。
- サーレハ、ヤシーン・ハージュ『シリア獄中獄外』岡崎弘樹訳、みすず書房、2020年。
- シュミット、カール『政治的なものの概念』権左武志訳、岩波文庫、2022年。
- フーコー、ミッシェル『監獄の誕生—監視と処罰—』田村俣訳、新潮社、1977年。
- フランクル、V.E.『意味による癒し—ロゴセラピー入門』山田邦男訳、春秋社、

2004年.

ベルクソン、アンリ『道徳と宗教の二つの源泉』合田正人ほか訳、ちくま学芸文庫、2015年.

宮地尚子『環状島＝トラウマの地政学』みすず書房、2007年.

レーヴィ、プリーモ『アウシュヴィッツは終わらない これが人間か』竹山博英訳、朝日新聞出版、2017年.

——『溺れる者と救われるもの』竹山博英訳、朝日文庫、2019年.

<欧米語>

Cooke, Mariam, *Dissident Syria: Making Oppositional Arts Official*, Duke University Press, 2007.

Hage, Ghassan, *Alter-Politics: Critical Anthropology and the Radical Imagination*, Melbourne University Press, 2015.

Makdisi, Ussama, *Age of Coexistence: The Ecumenical Frame and the Making of the Modern Arab World*, University of California Press, 2019.

Middle East Watch, *Syria Unmasked: The Suppression of Human Rights by the Asad Regime*, Yale University Press, 1991.

Sharabi, Hisham, *Neopatriarchy: A theory of Distorted Change in Arab Society*, New York: Oxford University Press, 1988.

Taleghani, R. Shareah, *Readings in Syrian Prison Literature: The Poetics of Human Rights*, Syracuse University Press, 2021.

Ziadeh, Radwan, *Power and Policy in Syria: Intelligence Services, Foreign Relations and Democracy in the Modern Middle East*, I.B. Tauris, 2012.

<アラビア語>

Barro, Muḥammad, *Nājin min al-maqṣala: Thamāniya a'wām fī sijṇ tadmur* [ギロチン台からの生還者—パルミラ監獄における8年間—], Jusūr lil-tarjamat wa al-nashr, 2021.

Bayraqdār, Faraj, *Khiyānāt al-lughat wa al-ṣamut: Taghrībātī fī sujūn al-mukhābarāt al-sūriyyat* [言葉と沈黙の裏切り—シリアの軍事刑務所での疎外経験—], Al-Jadīd, 2006.

Ghaliyūn, Burhān, “Taqdīm bayna ‘abath al-tārīkh wa makru-hu” [序文：歴史の嘲笑と裏切りの間で], In Barro, Muḥammad, *Nājin min al-maqṣala*, pp.15-23.

Ḥammād, Muḥammad Salīm, *Tadmur... Shāhid wa mashhūd: Mudhakkirāt mu‘taqal fī sujūn al-asad* [パルミラ、目撃者と目撃されたもの—アサドの刑務所の収監者

- 手記—], Markaz al-dirāsāt al-sūrīyya, 2006; Muhammad Saleem Hammad, *Tadmur: Witnessed & Observed*, trans. the Syrian Human Rights Committee, <https://www.shrc.org/en/?p=29107>.
- Khalīfa, Muṣṭafā, *Al-Qawqaw'a: Yawmiyāt mutalaṣṣiṣ* [巻き貝—覗き見の日々—], Dār al-ādāb, 2008; Khalifa, Mustafa, *The Shell: Memoirs of a Hidden Observer*, trans. Paul Starkey, Interlink Pub Group Inc, 2016.
- Ṣāliḥ, Yasīn al-Hājj, *Al-Faṣī' wa tamthīlu-hu: Mudāwalātun fī shakl sūrīya al-mukharrib wa tashakkuli-hā al-'asīr* [おぞましさとその表象—破壊されたシリアの形とその困難な形成に関する考察—], Mu'ssasat dār al-jadīd, 2021.
- Ṣāmu'īl, Ibrāhīm, *Al-Nakhnakhāt* [ゴホン、ゴホン], Dār al-jundī, 1990.

<映像資料>

- Borgmann, Monika & Slim, Lokman Slim, *Tadmor*, 2016, 103 minutes.
https://www.menaprissonforum.org/films_detail/9/
- Muḥammad, Hāla, *Riḥlat ilā al-dhākira*, 2006, 47 minutes.
<https://www.youtube.com/watch?v=oKeZyoCylyk>

Representations of the Palmyra Prison Experience in Contemporary Syria:

“Resilience of Meaning” in the Memoirs of Muslim Brotherhood Members

Hiroki OKAZAKI

This paper aims to analyze how Syrian writers have described their experiences in Palmyra prison, a Syrian prison known for its harsh torture, arbitrary executions, complete disconnection from the outside world, and the spread of infectious diseases within its confines. In particular, I will focus on the memoir *Survivor from the Guillotine* (2021) by Muhammad Barro, a member of the Syrian Muslim Brotherhood who was the most prominent victim of this prison and its survivor.

First, I will argue how physical and psychological domination, such as the routinization of torture and the suppression of vision in the Palmyra prison, were portrayed in Syrian prison literature by secularist writers and non-Syrian Islamists. I will also examine the margins of human resistance, such as communication through sound, by sharpening the sense of hearing and the use of memorizing techniques that go back to the recitation of the Qur'an.

In addition, I will treat in detail the whole chapters of Barro's memoir, which clearly presents not only various aspects of “bare life” (as Giorgio Agamben calls it) in the Palmyra prison, but also his search for two kinds of salvation in the next and this world, as well as the coexistence of people of different beliefs who rejected Islamic fundamentalism. In conclusion, I will also confirm that Barro's ideas

resonate with those of Auschwitz survivor Viktor Frankl, who spoke of the “resilience of meaning”.

As a whole, I will compare the memoirs of other Nazi camp survivors, such as Primo Levi and Jean Améry, with Syrian testimonies on Palmira prison. It will help to demonstrate that Syrian Islamists, while enduring hell and simultaneously retaining their deep faith as Muslims, do not narrate their experiences as unique to Syria, but as a universal issue related to the Holocaust and other “wars of extermination”.